

亞細亞大學準硬式野球部誌

球音

1962.10 創刊号

01.8.21

目 次

部誌「球音」の発刊に当つて……………	深 沢	1
「創世記」草創記……………	四年・中 山	2
思い出……………	四年・齊 藤	9
草野球回想録……………	四年・山 浦	11
「亭主」の思い出……………	四年・上 田	14
「チーム・ワーク」将来の準硬式野球部のあり方……………	三年・川 崎	16
入 造 り……………	二年・望 月	17
チーム・ワーク……………	一年・桜 井	18
我々の望む事……………	一年・石 川	18
会計より部員諸君に対する要望……………	二年・石 村	19
「合宿雄感」渋温泉での合宿に関連して……………	二年・石 崎	20
合 宿 後 記……………	一年・有 坂	21
「ネットウラ」"和は刀なり"……………	四年・寺 井	21
思いつくままに……………	四年・脇 田	22
準硬式野球部の出来るまで……………	四年・細 谷	23
一傍観者の記……………	四年・明 衆	24
	芳 明	



「戦績」……………

「住所録」……………

あとがき……………

32 31 25



部誌「球音」の発刊に当つて

実 沢 深

「亜細亜大学準硬式野球部監督兼部長」という、どうみても私には似つかわしくない、顔の赤らむような立派な肩書きを頂戴してから、早いものでもう二年半の才月が流れた。初代監督、初代部長とはいつても、野球のなんたるかもろくに知らない全くの素人の私に、大きな抱負も、ましてや経倫なぞありようはずがない。「勉学とスポーツの両立」これだけを私は今日まで、馬鹿のひとつ覚えのように繰り返してきたにすぎない。

しかしよくしたものである。この二年半の間に、準硬式野球部は東都リーグの四部に加盟以來、順風に帆をあげて三部へ、三部から二部へと昇格した。このような短期間の急速な発展は、部員諸君の乏しいやりくり算段を知るだけに私には驚きだつた。これもみな、中山初代主将をはじめとする数少い先輩部員諸君の、生みの苦しみと育ての苦心に耐えてきたなみなみならぬ情熱に負うところが大きい。

おかげで私も、「名将の下に弱卒なし」という諺を書き変えてもらつたので、弱将ながら身の狭い思いをせず、さらに部員諸君とのおつき合いの続けられることを喜こんでいる。幸いこのたび部誌「球音」の創刊号を発刊する運びとなつたが、この際に、先輩部員たちの苦しかつた歩みの跡を憶ふとともに、若い部員諸君の今後の発奮にいきさかでも刺戟となれば幸いである。今後この部誌は先輩から後輩へ、後輩から次の世代へと受け継がれていくであろうが、部員諸君の絶ゆまない努力によつて結実した豊かな収穫で、誌面の色彩られることを期待して已まない。

最後に、さらに躍進することを部員一同、先輩の諸兄と、終始暖かな応援を寄せられた部外の諸兄にお誓いするものである。

創世記

草創記



中大四年
中山博之

(一) 決心

私が準硬式野球部を造ろうと考え始めたのは、私が一年(三十四年)の十月、前期の試験が終つた頃であつた。

「昼間勉強が出来、その後の余つた時間で野球を楽しむ」これは何と理想的な部生活であろう。しかし、それには多くの問題があつた。

先ず、グラウンドが無いことである。今、硬式野球部が練習している新グラウンドは、その当時は畑で旧グラウンドしかなかつた。ここで、私の考えは一旦断念せね

ば」。

この言葉は、我ら三人にとつては驚ろきであるとともに、喜ろこびであつた。何故なら、私達は、直ぐに連盟に加盟しようとは考えておらず、将来はそうしたいと思つていたのである。

それから、私は、連盟へ足しげくかよつた。ある時は大西君と、ある時は明榮君と、連盟規約や加盟方法をすべて調らべた。「思つたより簡単だ。これなら少々無理をすれば加盟できるぞ」私は、ますます自信を得たのであつた。

(二) スカウト

自信をえた私達は、スカウトを開始した。これまでに、五、六人の友人に誘いはかけていたけれど、直ぐにO・Kは取れなかつた。

現在名捕手でならしている上田忠朗君は、明榮君の紹介で寮でスカウト才一号成功、初代、マネージャー兼会計の齊藤嘉寿穂君は、私が何度かお願いしてO・K、好打者岡安君は、親友の三井君の紹介で入部といつた工合

ばならなかつた。

十一月に入り新グラウンドが建設されることになつた。ここにおいて、私は、以前と違つた情熱がわいてきた。

「よし、造つてやるう」こう考えるところとしておれず、大西隆夫君、明榮芳明君にこの構想を話し、色々と相談した。両君共に大賛成で「協力はおしまない。立派な部を造ろう」と励ましてくれた。私の心は、はずんだ。十一月も終りが近づき、寒さが一段と加わりとうする夕暮であつた。

二、三日後、学友会の寺井誠一君にこの構想を話し、体育局との交渉をお願いし、その夜、私は郷里へ帰つたのである。

(三) 体育局へ

年が明け三十五年が始まつた。

私は、大西、明榮両君とはじめて体育局へ許可を得るために相談に行つた。丁度、田島、館岡先生がおいでになり、直ぐに許可を下さるとともに、田島先生が次のように言われた。「同じ部を造るのなら連盟に加盟しな

で、十六名のスカウトに成功した。この結果、部結成という空氣が急速に盛り上がったのである。

(四) 深沢部長就任

部員は集つた。しかし、部の柱となる部長がまだ決定していない。私達は頭を痛め、再び体育局へ相談に行つた。その結果、現在部長であられる深沢先生を紹介して戴いたのである。

教授控室へ入つて行く時の私達の期待は大きく、胸が激しく波打つていた。先生にお目にかかつたとたん、私は、「さつと協力して下さい」と思つた。先生は、私達の話を熱心に聞いて下さり、「学生らしい立派な部を作ろう」と快よく承諾して下さいました。

(五) 同好会発足

後期の試験も近づいた一月の末、待ちに待つた準硬式野球同好会の発足を聞いた。体育局の規定で直ぐに部として認めてはもらえないので、同好会として発足したのである。同好会と部の違いは、部費が一銭も貰えな

いことで、援助金として、何がしかのお金を戴けるのであつて、幾らもらえるかは、全然不明である。

この時集まつた会員は二十二名、私運に取つては思わぬ人数であつた。深沢部長は、「学生の自分は勉学にある。その余暇で野球を楽しむ」という点にこの会の目標をおくと言われ、勉学とスポーツの両立を強調され、会員は、おしめない拍手を送つたのである。

そして、コーチに堀田敏夫先輩、主将は私、マネージャーに斉藤君を選び、三月二十日より練習を開始することを決めて、無事発足会を終つたのである。

発足会の時の、エピソードを一つ記そう。

「準硬の親分は君か」と言つて入会を希望してきた学生がいた。私は「変な学生が入会してきたな」と内心驚きながら入会を喜こんだものである。この学生こそ、山浦晴朗君であり、後に、コーチに就任したその人である。

(内) 電報で上京、連盟加盟

一年も終り春休みが始まつた。三月十一日寺井君より「十四ヒカイギ アリジ ヨウキョウコウ」との電報が

の朝私は張切つて練習に行つた。が、集つたのは何と山浦、斉藤両君と私の三人だけだつた。私の期待は裏切られたが、三人でも良いからやれるだけやろうと、その日はキャッチ・ボールやノックをした。上田君が東京にいると分つたので、翌日私達は彼を呼びに行き、彼も練習に参加する事になつた。こうして、四人で練習は続けられたが、我々は一人でも多く練習に参加するようにと全員に葉書を出した。そして待つた。然し誰も来てくれなかつた。毎日毎日四人での練習を続けた。そして三月は過ぎた。四月になると少し増えたが、一番多い時でも七人だつた。我々の前途は暗かつたが、ここであきらめてはと少数人数でもいい、やる者だけでやろうと齒をくいしばつて練習をつづけたのであつた。

その間にも新球場の完成が近づいていた。我々はある日、新球場のマウンド作りをする事になつた。その日は寒かつた。我々はリヤカーで土運びをし、マウンドの形に仕上げていつた。それにしても寒さがこたえる。苦勞の末夕方やつと仕上がつた。報酬をやるというので我々は金一封を期待したが、何とアンパン二個が空腹に入つ

きたので、私はただちに上京し、連盟に行くこと、至急加盟手続きをとるように言われた。加盟するには費用として一万円必要だつたので、翌日私は虎の子の貯金をおろして連盟へ行つた。

ふだんは金のないあいつに、よく一万円都合がついたなど読者は思うかもしれないが、この日のためにと、せつせと貯金したのである。その時は連盟に加盟したばかりに夢中で支払つたのだが、今から考えるとこれは大きな賭であつた。というのは、何の規則もなく、ただ単に野球の好きな者が集つたという丈で、果してチームとして永く続くかどうか、何人がきびしい練習に耐えてついでいけるか、全く分らなかつたからである。とあれ、私は手続を終えて「やるぞー」の意気にもえて信濃町の連盟を出た。

(外) 三人で初練習

上京以来、私は如何にしてチームをやつていくかに頭を痛めた。しかし、まず練習をしつかりしなければ三月二十日から練習を開始することにした。さて、二十日

たのみであつたのは、今でも笑い話になつている。

話は前後するが、三月の練習開始の直後、我々は明楽君の紹介で浅草の「美須津」へ道具を買いに行つた。一式道具(ベース、バット、ボール、捕手用具)の代金六千円であつたが、四人で運んだその重かつた事を今でも覚えてゐる。

(内) 処女試合

新学期の始まる四月十日に始めてメンバーがそろつたので、一週間後の初試合を目指して本格的な練習を開始した。丁度その時の事である。私は偶然新入生の中に高校の後輩がいるのを知つたので、彼を強引に入部させた。彼の努力はすさまじく一躍二塁の正位置を獲得したのである。特に彼の打力はずば抜けていて、後に三部昇格の際の大きな力となつたのである。彼こそ日村勝英君である。

四月十七日その日は朝から曇りであつた。我々は新調のユニホームで処女試合に臨んだ。相手は自由学園である。我々のメンバーは次の通りであつた。

安森 村山 浦村 田田
岡永 日中 上山 野植 塩
(編) (二) (三) (四) (五) (六)

試合が始まると同時に雨が降り出した。ゲームの進行と共に増々雨がひどくなり、試合は惨々であった。十六対九！我々は敗けた。残念であつた。然しこの敗戦にも私の心はそう暗くなかつた。

というのは、我々の手で生まれたチームで初めて試合が出来たというこの喜びが、敗戦のくやしさに勝つたからである。その後、我々は全勝した。然し、対自由学園の敗戦の為に二位にとどまり、優勝した自由学園は三部へ昇格した。この時、私は練習さえすれば、今に我々だつて三部へあがるだろう。いや必ず上つてみせると固く心に誓つた。

(四) エース 登場

春のリーグ戦で自由学園に破れた後、急に連勝し始めたのは、一つの理由があつた。四月になつて新入生（

この合宿の目的は練習それ自体ではなく、「同じ釜の飯を食べる」事に依つて、会員相互の融合を計り、チームを鉄のように団結させようという点にあつた。この意味において合宿は成功した。

何故ならば、秋のリーグ戦に優勝し、さらに三部へ昇格するという成果を得る事になつたからである。なおこの合宿より山浦君がコーチに就任する事になつた。

九月に入つていよいよ秋のリーグ戦が開幕した。春に比べると確かに我々のチームは成長していた。我々は連戦連勝し全勝で優勝した。

いよいよ三部との入替戦だ。相手は自由学園。春に苦杯をなめたあの自由学園である。十一月二十六日我々は、雪辱を期して敵と相対した。その日は冷い風が吹きすさび、砂塵が舞い上り「試合は荒れる」とでも語つているような天候だつた。果せるかな試合は荒れた。先取点は我々が取つた。然し、敵は執拗に追いつく。我々が取る。敵が追いつき逆転する。こうして試合は二転三転した。この日ばかりは、深沢部長も陣頭指揮に立ち、我々の勝利の為に全力を注いで下さつた。この采配に応えなくて

今の三年生)をスカウトしたが、それでも投手陣が弱体であつた。私はかねてから目をつけていた同じ下宿の一年先輩の鈴木康夫さんに何とかして入会して頂きたいと思ひ、再々お願ひしたが、どうしても同意して貰けなかつた。自由学園に敗けた後のある日、練習をしていた私はふと鈴木さんをさそつてみようかと軽い気持ちで電話をかける。鈴木さんはグラウンドに遊びに来て上田君を相手にキャッチ・ボールを始めた。これが縁となつて、鈴木さんは入会され、これ以後、エースとして我がチームのマウンドを守りぬき、連勝の立役者となつたのである。

春のリーグ戦が終り、関東選手権を迎え、我々は一回戦で専修大学(一部)と対戦した。が十一対〇と惨敗し、我々の実力と一部校の実力との開きの大きさをまざまざとみせつけられた事を、今でもはつきりと記憶しているのである。

(五) 三部 昇格

八月二十五日から三十日まで、長野県菅平で初の合宿を行なつた。参加したのは十一人と少人数であつたが、

はと我々は必死になつた。

八回我々は再び逆転に成功しそのリードを守り抜いた。試合は終つた。勝つたのだ。嬉しかつた。今迄にこれほど嬉しかつた事はない。私はジーンと目頭が熱くなつた。深沢部長も「よかつた。よかつた」と喜びの声をかけて下さる。こうして、ついに我々は三部昇格をなしとげた。秋のリーグ戦では、最優秀投手賞を鈴木さんが、最高殊勲選手賞を岡安君が、首位打者賞を私と、我がチームで独占受賞したのである。

(六) その後 二部 昇格 まで

昭和三十六年を迎えた。昨年の実績が体育局に認められ正式の部に昇格し、経済的に楽になつた。そこで、気分一新のためユニホームを新調したのである。

しかし、この年、我々は三部校としてリーグ戦に出場して、春秋とも健斗したが、まだ優勝という所まではいけず、三位、二位にとどまつた。しかし、再び関東選手権に出場し、一回戦で一部校の学習院大学と対戦し、鈴

木投手の好投と、それに応えるバックの好守好打とによつて、七対三と快勝した。二回戦は、法政大学と対戦したが五対〇と惜敗した。然し、我々のチームがこれほど善戦できるようになつたのを思うと私達は満足した。

昭和三十七年を迎えた。

三月、我がチームの大黒柱である鈴木投手が卒業された。然し、四月になると、今迄にない優秀な選手を迎えて、その穴をうめる事ができた。

春のリーグ戦では、見事に優勝し、入替戦では、一ツ橋大を二勝一敗で下し、チーム結成以来二年半で二部昇格を達成した。

(十一)後輩に与う

以上私は、準硬の誕生から成長への歩みを記してきた。私達がチームを作ろうと思つたのは只「野球が好きだから」の一言につきる。然し、一度チームが出来て歩み始めると「好きだ」だけではとてもついていけない苦しみが現われた。楽しく野球遊びをするのなら、その辺の草野球で十分だ。

いやしくも、大学の名誉を背負つたチームとして野球

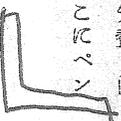
をする以上は、そこには、厳しい規律と激しい練習が必要だつた。その上、創設期にはつきものの経済的な負担が我々を苦しめた。然し、それにもめげず、部長をはじめ我々はここまでの道を切り開いてきた。これから先は、栄光への道が待つている。一部昇格、関東選手権優勝へと道はまだまだ遠い。しかし、後輩諸君、栄光への道を歩むのは君達なのだ。我々が築き上げて来たこのチームを、立派に育ててくれたまえ。我々は何時でも一致団結して協力し、激しい練習を重ねてこまできた。諸君、「団結と練習」を忘れるな。そうすれば必ず諸君の手に勝利の光が輝く。

私達創設期の者は、間もなく去るであろう。然し、私は、きつと君達の手で亜大準硬部の上に栄光の鐘が鳴る日があるのを信ずる。

君達よ。頑張れ給え！私は何処にいようと、何時でもその朗報が私の耳に届くのを待つている。

最後に、数々の苦難を共にして下さつた深沢部長を初め、今も私と共に現役で活躍している上田、岡安、斉藤

山浦の諸君、そして、今はユニホームをぬいだ先輩、同僚の方々の御協力に厚く御礼を申し上げて、ここにペンをおく。



思い出

四年・斉藤 嘉寿徳

私が、準硬式野球部の一員となつたのは、一年の終りの期末試験が間近に迫つていた日であつた。中山君が、私に軟式野球部を作ろうと思つているのだが、君も一緒にやらないかといつて誘われた。こうして私が、軟式野球部の一員になつたわけである。

私が、野球部に入つた理由は、野球が好きであつたことと、私が、小学校一年の時に病氣になり、約一年間も寝たきりで過してしまつた、そのために運動神経が、鈍くなつたのではないかと、自分では思つていたが、そのため、小学校の頃、体育の時間に友達によく笑われま

した。現在でもいくぶんそれが残つていて、思うように活動できないこともあります。それで野球をやり、いくぶんでも機敏な動作ができるようになればよいと思ひ、部に入つたわけです。このような理由で部に入つたため、技術的にも人より劣つていたので、ほかのことで協力しようと思ひ、会計を引受けることにしたので、幸いに、高校で商業を勉強したので、簿記と珠算だけはいくらか自信があつたので、引受けたわけです。しかし、部の活動が始まると、部員が少ないため、いつのまにかマネージャーを兼ることになつてしまいました。

こうして、中山内閣が誕生したわけです。この時の同僚の顔ぶれは、部長兼監督に深沢先生、主将が、中山君(当時一年)、コーチが堀田さん(当時二年)、書記が野村君(当時一年)、会計兼マネージャーが私といつた顔ぶれでした。

こうしてクラブの結成も終り、学友会、連盟に加盟の手続も終り、練習を二十日より始めることになりました。

この日は、寒い風が吹いていましたが、天気はよく、練習するにはよい日でした。

しかし、練習開始の時間になつても、私に、中山君、山浦君の三人しか集まらず、実に寂しい初日でした。

初日は、三人でもあすは誰かくるだろうという希望を持ち、その日は帰るのですが上田君がきたほかは初日と同じく、こういう日が続き、少し後に、岡安君が顔を出し、永森君もきて、やつと六人といった状態でした。しかしこの二人も続けて練習にこなく、練習らしい練習もできずに、新学期を迎えてしまいました。新学期と共に部員も集り、それに中山君の後輩の日村君（新入生）が加わり、練習らしい練習をすることが出来るようになりましたが、このときはもう春季リーグ戦が近づき、十分に練習できないまま、リーグ戦に臨んだわけです。

才一戦は、丁度新入生の入学式が学校で行われており、新入生やらその付添の人々が見ている中を対自由学園とここなわれましたが、チーム結成して初めての試合なので、チーム・ワークもうまくとれなく、選手諸君も、あがつてしまい、プレー開始と共に青い顔をして試合に臨んでいる選手もいました。

それに途中より雨が降りだし、試合は混乱し十六対九

古いグラウンドで硬式野球部が使つていたため、総べて硬式のあいた時にグラウンドを使い、試合を行つたり、練習しなくてはならず、その交渉もマネージャーの仕事としてしなければならず、それに使用後の整理が悪いといつて、おこられたこともありました。こうして、どうにか一年間を勤め、後輩に仕事を渡したわけですが、その間仕事が、意外に面倒なので、やめようと思つたこともありましたが、また主将とも仕事やら練習のことでも衝突し、あつさり部をやめてしまおうかと考えた事もありました。しかし苦しいことばかりではなく、楽しい事も数々ありました。これも今から思えば楽しい思い出になつてしまいました。

最後に、後に残る部員諸君に、一言いいたい。それは、自分の練習量を省みず、試合にだしてもらえないから、練習をさぼるといふような、けちな気持を捨て、練習に励んでもらいたい。そして一日も早く一部に昇格してもらいたい。

まだ書きたいのですが、まとまりがなくなつたのでこれでペンを停めることにします。 以上

で、善戦空しく負けてしまいました。それ以後の試合は、新入生の加入と、鈴木さんという優秀な投手を補強し、強力なチームとなり、大差で勝ち、春季リーグは惜しくも準優勝に留まりました。こうして現在に至つたわけです。

チームの、目覚ましい活動と共に、会計兼マネージャーの仕事も忙しくなり、とくに会計の面では苦勞しました。というのも当時は、実績がなければ部になることができず、同好会でしたので、部費がもらえなく、同好会の活動費としていくらかの資金を得たのみでした。そのため一部の道具を買つたらなくなり、連盟費やその他の費用は、中山君と、二三人の有志より借りて、まかなつていた状態でしたので、ボール一個でも、まつたく貴重でした。しかし部員も増え、練習も激しくなると、バットは折れ、ボールはわれてしまい、新しく買わなくてはならず、その金の工面に苦勞しました。

また、会費が集まらず、あまりしつこく請求するので、部員からさらわれたこともありました。また、グラウンドも現在の硬式のグラウンドが出来てなく、

草野球回想録

四年・山浦晴朗

二部昇格の日の思い出

それは、私がすでに亜細亜大学準硬式野球部のユニホームを脱いでから、二シーズン後の日のことであつた。昭和三十七年六月二十九日。五〇で一ツ橋大学を破つて、東都大学リーグ才二部への昇格を遂げたその時、私は同僚達をそのベンチの横で迎えた。

中山、上田、岡安、そして斉藤の四君への祝福は、この日を夢見て、黙々と創設期を過ごして来た者へのそれであつた。

そして、川崎、佐久間両君以下後輩諸君への祝福は、これから、この栄光を背負う者への励ましのそれであつた。

この日を誰れもが待つていた。だが、この日は唯平易に招来されたのではない。すでにユニホームを脱いだ幾人かの者が、この栄光ある日までを支えてくれたのであつた。

初陣の日のプレイヤー達

私は、創設期時代の多くのプレイヤー達を、この目でコーチヤーズ・ボックスの片隅から常に見守つて来た。初陣の日は春雨が糸をひいていた。

塩田、永森の両投手を擁し、堀田コーチに率いられて、雨の中で東都大学リーグ入りをした。即ち、昭和三十五年四月十七日のことである。堀田コーチとは、昨年、交換留学生として香港の新亜書院へ渡られた人である。

このシーズンは、とにかくひどいオンボロチームであつた。

唯、その中であつて、二代主将になつた名手岡安と、そして、当時の主将であつたファイター中山の二人がひとときわ光つた存在であつた。それにもう一人、二塁ベ-

スには、入学式を終えたばかりの日村という新人離れのしたふてぶてしいプレイヤーがいた。

現在の主軸選手の川崎、佐久間の両選手については、当時、川崎はばかにヒヨロ長く、佐久間は妙に感のいい小細工のきく選手だと云う印象を受けたことを覚えてゐる。

チーム結成以来初戦のこの日、16-9の乱戦の末敗退はした。けれども、初陣にしては9点は上出来だと云うのが、堀田コーチの評であつた。

それにしても、この9点の1点目は私がホームを踏んだのであつたから、結局、チーム結成以来始めてのホーム・インは、他でもないこの私自身なのであるが、今はもう忘れられた事実となつた。

上昇気運に乗り始めた頃

才二戦の四月二十四日からは、チームは上げ潮に乗つて、この春のみでなく、秋のシーズンのその終了まで連戦連勝の意気に燃え立つていた。

才一戦が終つて数日の後に、真白のユニホームを着けた新人が練習に姿を現わした。

ホツソリとした体を、まるで弓のようにしならせて、初日から素晴らしい快速球を放り込んでいた。

この投手こそ、恐らく上田君の随想の中にも出るであろう先輩の鈴木氏である。

かくて、それ以後四シーズン、あの細い体に鞭打つてマウンドを死守されたのであるが、それこそ、私は帽子をとつて最敬礼の心情であつた。

捕手の上田が名手の片鱗を見せて来たのもこの頃のことである。そして遂に、この上田は昨年(三十六年)の関東大学選手権では、二回戦に対戦した法政大学の選手口からして、称讃の言葉が贈られるに至るのである。

昭和三十五年の秋のシーズンを境にして、本当の基礎固めの為の功勞のあつた者は、そのほとんどがグラウンドから姿を消した。

塩田先輩を始め、野村、松橋、植田、高橋、戸田といった面々であつた。

これらの諸氏は、多くの華やかな活躍の場所も与えら

れずチームを去つた人々ではあつたけれども、創設期の役割は完全にはたしてくれた。

云わばオンボロチームの形成者達であり、そして私は、このオンボロチームを率いるオンボロコーチであつたのだつた。

ところが、このオンボロチームが、昭和三十五年九月十日から開始された東都リーグ秋のリーグ戦で四戦全勝で四部初優勝を遂げ、更に余勢をかつて、三部・四部入替戦でも、十一月二十六日に自由学園を破つて才三部昇格をはたしたのである。

創設期を終りユニホームを脱ぐ

才三部では前記の諸君の他に、長谷川、土井、佐藤、永井、木内といった、今はもう残つていない選手が主軸になつていた。

それに、私の同期の鎌田君などもいた。思えば実に激しい新旧の交代である。

投手には石崎、平山がおり、石村は当時はまだ三塁手

であり、望月はライトにいた。

才一戦は見事に楽勝したが、才二戦には延長の末、惜敗した。

新進チームは初めにつまづくとガタが来る。

私の悪采配もあつて、チームは不振の連続であつた。だが、勝負とはえてしてそういうものではなからうかと思っている。

昭和三十六年のこの春のシーズン中に、私はユニホームを脱いだ。その時すでに、我がチームが、私の如きオンボロコーチが率いるべきオンボロチームから脱皮しているの気がついたからである。

かくて創設期は終了し、共に、私の果すべき任務も完了したのであつた。

最後に、野球人に教養は不可欠である。これなくば、唯の野人に劣ることを覚悟しなければならぬ。そして又、野球が無教養の弁解に使われることは許されざることである。

「亭主」の思い出

四年・上 田 忠 朗

さて、ここで名(迷)捕手の登場である。「盗塁される王」と異名を持つ私は準硬式野球部初つて以来今日までずつとマスクをかぶつて来た男である。われこそは名捕手、貞婦の鏡と自から認めているのである。

しかし、亭主たる投手はすでに幾人か代つた。創立当時の投手は当時三年生の塩田と言つて、コントロールのよい速球正統派の投手であつた。彼は投手としては立派な素質を持つており、当時の硬式野球部から準硬式へ転向して来た人であつた。しかし残念なことに、練習不熱心のためいつの間にか塩田投手はわれわれの部から遠のいて忘れられてしまつた。思えば素質あるおしい人であつた。

その頃、塩田投手と同等にわが愛をささげた亭主は、

手をリードし、私は捕手でありながら常にリードされる立場にあつた様な次才である。

鈴木投手と私は格別個人的な交際はなかつたが、いざ試合となると何にはさておいても勝つために専念しそのことが二人の意気を無言の内に一致させた。内外角にピシシ決る速球と打者のタイミングをはずすゆるいカーブ、それに時折り投げる彼独得のフォーク・ボール、このフォーク・ボールで打者のとどめをさし、見事三振を奪つた時は、さすがのポーカー・フェイスの鈴木さんもマウンド上でニッコリとして内心してやつたりという表情が、今でも忘れられない。

私の亭主はこれ以外にも幾人かいるが、それ等の人達は、現在現役で活躍している人達であり、そろそろ「三下り半」をもらわねばならない私にとつてこれらの投手を亭主と呼ぶよりはむしろ息子とでも呼んでやこう。そして若き息子達の将来に大きな期待をかけるのである。

花が咲いて

花が散つて

現在四年生の永森達昌君であつた。彼も正統派の速球とコントロールを武器とした頼もしい投手であつた。しかし投手と三塁手をかけ持ちしていたためそこに無理があり、長い間バッテリーを組みながらその真価を発揮しないうままに部を退いて行つた。私とひさを向き合わせコンビを組んだ投手は当時それ以外にもあつたかもしれないが、私の記憶するのはこの二人の投手である。

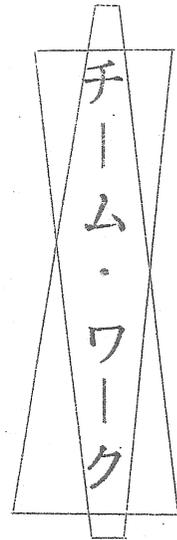
そしてやがてその年の春のシーズンも終り四部でかなりの成績を上げたのであるが、そのシーズンも移り四部でかなりの成績を上げたのであるが、そのシーズンの終り近く、当時三年生の鈴木という、サラブレッドの様に足の細い、体重の軽るような投手が突然私の前に現われた。この得体の知れない投手の出現により、私はこんな投手の相手をさせられることは面白くないことであつた。しかしいやいやながらつき合っている内に彼の投手ぶりを見事であり、小柄の身体全体をバネの様にして投げる球は、とてもあの身体から出て来る球とは思えないスピードがあつた。それ以来彼が卒業するまで、私は全くこの投手に教えられ、捕手のリードというより、投手が捕

秋が来た

これが私である。実を結ばないままに、とうとう秋が来てしまった。

野球はまさに、精神力と精神力の戦いである。だから面白いのである。

亜細亜大学準硬式野球部万歳。

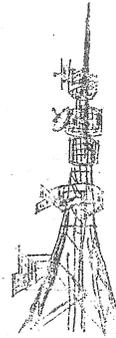


将来の準硬式野球部のあり方

三年・川崎 俊郎

歴史の浅い我が野球部も基礎がたまり、東都一部を
目指し、着々と練習にはげみ、努力しているしだいで
ある。

これからの部のあり方としては、学生野球の本分であ
る精神面をより以上身につけ、スポーツには絶対的に必
要である精神力を養うため、激しい練習や試合の体験が
必要である。精神力は肉体的な苦痛や精神的な圧迫に打
ち勝つことによつて養われる。勇猛心を奮い起し冷静に
相手に立ち向うことを要求される場、長時間つづく苦し



い試練を積極的に克服する必要のある場、自分の要求を
殺してチーム全体のために、その役割を果たすことを必要
とする場、審判の誤った判定にもすなおに従わなければ

ならない場、競争相手や同僚に対して礼儀を正しく寛容
であることを要求される場、また疲労してからあと片づ
けやグラウンドの手入れをする場、試験が近づいてからの
練習の場、試合に勝つたり負けたりする場など、いかに
野球に、いやスポーツにおいて、精神面が必要であり要
求されるかがわかる。

歴史の浅い我が部では、今後ともはげしい試練をつみ、
精神的にも肉体的にも立派な人間をつくり上げるため、
ますます努力して行く事である。

人造り

二年・望月 俊明

“良いチームを作る為には先ず人造りから。
昨今の政界では、人造り”と云う言葉が盛んに使われ

ているが、この言葉は我々がチーム造りをする上にもあ
てはまるのではないだろうか。

ある学生野球の權威がもの本で「学生野球は人間教
育であると云うことをよく理解し、不屈の精神と若人の
覇気に富んだ者を造り出し得てこそ真のチーム造りがで
き得るのである。」と云うようなことを言つておられた
が、この言葉は我々部員にとつて特別に含蓄が多いよう
に思える。学生選手は学業も操業も学生として恥かしく
ない者でなければならぬから。人造りによつて
得られたとその良き人材を持つて造られた野球部は平素
の練習に対する心構えが良いから、一見ぎこちなく、へ
たに感じても、いざ大事な試合となれば驚く程の力を発
揮し実力以上の試合をしようのではないだろうか。

またこれと平行して雨の日などを利用して、ルールの研
究をしたり、セオリーについて意見を述べたりして、ベ
イスボールに対する「頭造り」をすることも大きな要素
の一つである。と私は思うが残念ながら現在の準硬式野
球部は頭造りをするところのミーティングの時間が余りに
も少い。一考を要したいところである。しかしながらな

にはともあれ、やつとレールにのつて走り出したところの我が準硬の部がより発展するためにも、貧乏所帯で首のまわらなかつた頃の同好会から部への過程において血も滲むような大苦勞をなされた諸先輩の努力に應えるためにも、また学校当局の支援に應えるためにも、我々部員の一人一人がもつと頑張つて、真剣に自覚あるプレーをしなければならぬだろう。そしてこの二部昇格を試金石としてもつともつと飛躍しなければならぬだろう。我々自身のためにも、部のためにも。

チーム・ワーク

一年・桜井武雄

亜細亜大学準硬式野球部は、まだまだ年月も浅く、部員も少く、予算もあまりない。重要なことは少ない部員で、まともなグラウンドもなく、いかに試合に勝つかと言ふ事である。

それには野球そのものを知る事である。(ブレイの上でも理論の上でも)。それ以上に必要なものは、個人対そしてフオーク・ダンス部と隣り併わせて生活している状態だ。昼近くなるといつも部員がこの室に集つて来る。「チワース」、「オース」などと挨拶が交わされる。

「チワース」、「オース」などと挨拶が交わされる。まずオースに黒板を見る。「ええと、今日は硬式のグラウンドか、ええな」、「張り切るぞ」などと部室の中は色々な話が咲きながらやかな空氣が漂う。何時も使用しているグラウンドは硬式野球部の隣りにある狭いグラウンドだ。このグラウンドは石だらけで本当に石の中に土が有る様な所も有るくらい凸凹である。おまけに陸上部、排球部と兼用なのだ。こんな所で毎日練習をしていると、たまた硬式のグラウンドが使えらるとなるとフアイトも湧いて来るのだ。

又予算の少ない為、リーグ戦費がやつとの事。こんな状態で、三部で優勝し、今春一橋大との入替戦に勝つて二部に昇格した。部員は三十名ならずでそれぞれ自己流の練習で……。又我々の希望はオースにグラウンドが欲しい事。「なんとかたのんまつせ」。次に予算。トップ・ボールはすぐに中が割れて、バツティングにおいても実戦的にならないのでボール代が主なものとなつてしまつ

個人、上級生対下級生がしつかり結びつき、強いチームワークを作る事が一番の問題である。そういう点で準硬式野球部はまだまだ伸びる点を持つている。

チームワークを作る点において、監督がいない事は、(肩書きだけの監督制度をなんとかしなければならぬ)と反省している——監督注)最大の欠点でもあるが、そういう点を考えながら、上級生はチームを伸ばしてもらいたい。

我々の望む事

一年・石川大世

「準硬」、なあんだ、ゴムボールじゃないかなんて他の者から言われるかも知れない。しかし我々はそのボールに誇りを持つて取組んでいる。野球のボールの中で一番不規則、即ち *irregular* の多い取りにくいのが準硬式のボールだ。このボールと毎日毎日睨み合つているのが我々準硬の面々である。ガラスが破れ汚く狭い部室、然も一つの室を三つに仕切り、観光事業研究会、

ている。だから、予算をもう少し貰いたいものである。最後に我々は一部昇格を飽く迄目標として行っているので、今後より一層努力し、より準硬が発展する様に心掛けて行きたい。

会計より部員諸君に対する要望

二年・石村忠良

僕の役目つまり、会計というものは、いつも皆さんに部費を出せ、出せと口うるさくいいさぞかし厭な奴とお思いでしようが、僕の身になつて考えて下さい。もし部員の皆さんが、僕に協力してくれなかつたらどう云う事になるか考えて欲しい。ボール・バット・メン・プロテクター・レカース、その上連盟費・大会費、まだ、たくさんあるが、これらが皆払えなくなる。そうすれば我々の好きな野球も出来なくなつてしまうので、部員諸君がもう少し、関心を持ち協力してくれることを要望します。

合宿雑感



渋温泉での合宿に関連して

二年・石崎 勲

去年と今年の合宿生活での一大相違点といえば、当り前のことらしいが、禁酒制が施されたことの一言に尽きるところと思う。酒の密造をして、暗黒街のボスが横行した、あのシカゴの禁酒時代を連想せしめたのである。法を侵してまで、密造酒を飲んだ当時の人々の胸中は察するに余りあり。また、彼等と同様、我々もみなアルコールにうえた次才である。合宿での最後の晩支給された、一本のビールのうちまかつたこと！ やはり、酒は適量のむべし。良薬であると、つくづく思つた次才。ガソリンなし

舟につかつているだけで忽ち回復し、明日への闘志をわきたたせ、大変楽しい生活であつた。

合宿後記

一年・有坂隆夫

八月三十日(九月八日恒例の夏期合宿)が渋温泉を根拠に長野県中野市営球場で行われた。春季リーグ戦入替え戦の結果一ツ橋大に代つて待望の二部昇格を成し遂げ、この合宿では(一)チームワークの養成、(二)攻守技術の練磨を目的に20名の部員が参加、大なる成果を収めた。到着の翌日から早朝(日没まで)練習々々に明け暮れ、投手陣は大いに投げこみ、打者はより多くの球を打つて技術の向上を計つた。仕上げとして紅白試合を数度実施し、実戦の感を取戻し、合宿の全日程を消化したのである。

特に二部では学習大、専大、成蹊大、など強豪連を向うにまわして戦う以上、投手陣の奮起、インサイドベイスポールの熟知ETC、力不足をファイトでカバーし、悔いのない試合をしたい。レギュラーはレギュラーの座に甘

にはエンジンは動かないもの。

また、投手陣総勢五名が、まあ自由に独立して練習できたことは嬉しいことであつた。リング畑を横目に、走り走つた投手陣の成果は、この秋季リーグ戦においてもきつと遺憾なく発揮されることであろう。

あの広い球場の左翼のフェンスを越えたのは、ただ一人、主将のみであつたことは少し寂しい気もした。スラッガーといわれる諸君よ、奮起せよ！

今シーズンからは、二部昇格となつたが、新たな自己覚とともに、主将を筆頭に、代表的坊主頭の一年生をはじめ、全員、坊主の無我の境に入り、一部昇格をめざして頑張ろう。前進あるのみである。

最後に、就職試験を控えた四年生の参加が、この合宿を引き締めたことも、今新たに合宿生活をふり省つてみて忘れることのできない事実である。また、どんな事情があつたにせよ、一年生全員の参加とならなかつたことはかえすがえすも残念であつた。

温泉場での、野球の合宿とは、一聞したところ、ちょっと、ふつりあいのようなだが、練習で疲れた心身は、湯

んずることなく、サブ選手はそれを追い越すべく闘志をもち、ひいてはチームの士気を高め、それがやがては二部から一部への飛躍の礎となり、東都に亜大ありの名声を高める速因となるであろう。

亜大ガンバレ!!

バンザイ

ネットウラ



和は力なり

前学友会委員長

四年・寺井誠一

スポーツに限らず、和の必要なことは論を待たない。この和という一字の中に、"調"と"全"という姿をみる

事が出来る。個の優劣さは、必ずしも全の優劣を意味しない。

例えば、今年のプロ野球でパ・リーグ大毎に三割打者が四人いる。しかしチーム成績は五位である。この一事をみても解る様に個の優劣さは全の優劣さの必要条件ではあつても必要十分条件ではない。つまり一プラス一が二にも四にもなるところに和の強さがあり、同時にマイナスにも二五にもなる弱さがある。カプラスの力としてこの弱さのカバーが、スポーツマン・シップといわれるのではなからうか、十円銅貨も、表と裏があつて始めて通用するように、我々の性格をみても権利の裏には義務が、平等の裏には格差が存在する。つまり一見相反する如きものも、それをまず認める事が必要である。クラブ活動に於いてお互の長、短所を認め、そこから湧き出る力こそ、和の真の姿であろう。和は即ち相互理解である。大学のクラブが、人間形成に多大の影響力を持つだけに我々は、充分に心してクラブを運営しなければならぬと思う。

最後になりましたが、準硬式野球部の今後の御発展を

インがそろつたと記憶しているのですが……(後で、その連中が新しく発足した準硬式野球同好会だと聞いた時には、いささかアヤレてしまいました。)

一年前の冬——初めての仕事——

思うことあつて、私が体育局長になつたのは昨年二月、そして私が始めて行つた仕事は、キャプテン会議を開き「準硬」を同好会から部に昇格させることでした。予定通り満場一致で承認された時、ギコチなく頭を下げた、今は最上級生のU君の姿がその場の雰囲気と妙に合つていたのが印象的でした。

今年の春

学生部のH先生につれられて、合格通知を手にした新入生のS君が練習に参加したいと訪ねて来た時、私は前と違つた意味で驚き、「準硬」の大きくなつた姿を、まざまざと見せつけられた感じでした。

四年生のN君に頼まれて思いつくままにペンを走らせ

期待致します。

思いつくままに

——「準硬」の発展を祈りつつ——

前体育局長四年・脇 田 孝 夫

学生スポーツのよさは、学生として勉強しながらスポーツをするところにあるのです。最近プロ・スポーツや商業スポーツが盛んになつて、純粋な学生スポーツの世界もその影響を受けています。だがその様なスポーツは憎しみ、断固と排撃しなければなりません。余暇時間のすべてが精進と努力で埋められる……。 (美しい名譽のために)

二年前の春——初めての出会い——

「奇妙な連中が野球のマネゴトをやつてるな。」これが私の初めての感じであります。そして私の記憶が正しければ、ユニホームを着た学生とアンダーシャツに運動靴の学生が入り混つて、七人位で野球のマネゴトをしていたということです。一緒にいたH先輩と私が入つて+

て見ました。が、N君を中心と、た上級生の学生々活はその大半が「部」創造の苦しみと、喜びで塗りつぶされていくことでしよう。部員数も増え、いよいよ違つた意味で新しいスタートに立たされている「準硬」が、眼前の矛盾や壁を打ちやぶり、真の学生スポーツの姿を確立されることを望むと共に、「部」発展を心から祈りつつペンを置くことにします。

準硬式野球部の出来るまで

四年・細 谷 洋

準硬の出来るまでを簡単に書いてみる。

この野球部の出来る時の様子は「七人の侍」という映画を思いだす。この場合は「四人の侍」とでもしておこう。まず登場した男が中山博之という男。この男は非常に野球が好きである。そこで彼は、硬式野球をやるうとした……が硬式では屋間野球の練習をするので夜の授業を受けなければならない。で中山は授業の暇な時に練習が出来、試合の出来る野球部を造ろうと考えた。それ

で、一人一人に、てあたりしだい声をかけ、お前軟式野球部造らんか。……てな調子で始まった。小生に言わせると、もう少しましな人間を集めればいいのに！と思つたが、出だしなので頭数を揃えるのが精一杯だつたらしい。こんな具合で……集まつたのが、斉藤嘉寿穂、上田忠郎、山浦晴明という侍が四人、皆一癖持つた野郎ばかりである。スコア付け兼、会計係の斉藤君、満足なピッチャーや、野手のいなかつたその頃から何にも文句も言わず黙々と捕手を続けて来た上田君、人まとめがうまく親分気取りの山浦君、バリバリどなり先頭に立つて何でもやり、思つた事をズケズケとはつきり言う中山君。この他けつこう集つたが、皆な途中でやめたりサボつたりした連中のため、小生の記憶から消えて行く人達である。とにかく、こんなわけですらどうか人が揃いやつとこさ、同好会という形で出発、金は中山が出した。

昭和三十七年九月現在大して変らないあのデコボコグランドで練習が始まつた。その草野球チームが現在準硬式の二部である。三年前などは夢でこそ思え、現場を見ると夢なんか一ぺんにふつとんでしまつた様な状態であ

てはならない事だと思ふ。草野球から出発し、現在は一応型は出来たと言つても、まだまだ充分なものではない。がつちりしたチームワークを作り、学生として、スポーツマンとして、一層のファイトを燃やし、人間性をやしない、有意義なる学生々活を送る事の出来る場所とすべく心掛けてもらいたい。

戦績

才四部

35年度春季リーグ戦

才一戦

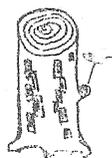
亜細亜大	0	2	0	2	0	1	4
自由学園	0	8	0	4	1	3	X

16X 9

才二戦

法政短大	0	0	0	1	0	0	2
亜細亜大	1	0	2	1	3	5	X

12X 3



つた。今はもう何もう事はない、この調子なら創立四年にして一部へ突入出来そうである。いや絶対に出来る。長野の合宿で諸々の練習をし、鍛えて来たのであるから……。

目標は……硬式に負けるな！ なか一層の努力をし、飛躍する事を期待する。

一傍観者の記

四年・明楽芳明

最初、準硬式野球同好会を作るべく話したのは三年前の冬だつたと思う。友人の下宿に数名集り、コタツで暖をとりながら、実行するよう決めたのである。しかし現在位置している東都準硬式リーグの二部などとは夢にも思えなかつた。少人数ながら欠かす事なく練習を行つた結果だと思ふと、努力する事のすばらしさをまざまざと知らされるのである。

しかしこの成長の陰には、多くの人々が貢献している事は現在の部員も、又、これから入部して行く人も忘れ

才三戦

亜細亜大	4	0	0	0	2	1	2
都立短大	0	0	0	0	0	0	0

0 9

才四戦

富士短大	0	1	0	0	0	0	1
亜細亜大	0	2	4	9	0	1	X

16X 2

才二位(三勝一敗)

35年度秋季リーグ戦

才一戦

法政短大	0	1	0	2	0	3	0	0	
亜細亜大	0	0	0	2	0	4	5	3	X

14X 6

才二戦

亜細亜大	0	0	1	0	0	0	2	1	2	2
都立大	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0

1 8

才二戦		才一戦		才二戦		才一戦		才二戦	
農工大	亜細亜大	農工大	亜細亜大	理科大	亜細亜大	理科大	亜細亜大	東海大	亜細亜大
0	1	0	0	0	4	0	1	1	4
1	1	0	0	0	3	0	0	0	0
0	2	0	0	2	1	1	0	1	0
0	7	1	5	0	0	1	0	0	1
3	1	0	0	1	0	0	0	1	0
0	0	1	0	2	0	0	1	0	0
2	0	0	0	1	4	0	0	4	0
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	3	1	0	X	0	0	2
7 12		2 8		7 12		7X 3		1X 0	
								8X 7	

才二戦		才一戦		才二戦		才一戦	
東薬大	亜細亜大	東薬大	亜細亜大	協同短大	亜細亜大	協同短大	亜細亜大
1	0	1	1	0	0	1	3
4	0	1	2	0	1	0	1
0	0	0	0	0	0	1	0
6	1	0	0	0	0	0	0
0	2	0	0	0	0	0	0
0	0	3	4	0	0	0	0
0	2	2	0	5	1	1	0
2	0	0	0	1	2	2	2
X	4	1X	0	X	0	0	0
13X 9		8X 7		6X 4		5 6	

才三位(五勝五敗)

才二戦		才一戦		才二戦		才一戦		才二戦		才一戦		才二戦		才一戦	
都立大	亜細亜大	都立大	亜細亜大	自由学園	亜細亜大	自由学園	亜細亜大	オープン戦	都立大	都立大	亜細亜大	都立大	自由学園	亜細亜大	都立大
0	2	0	2	0	1	0	1	0	2	0	2	0	0	2	2
1	0	1	0	0	0	0	0	(三部昇格)	0	0	1	0	0	1	1
0	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0
4	0	0	0	0	0	0	0		4	0	0	0	0	0	0
3	0	1	0	1	0	1	0		3	0	0	0	0	0	0
0	1	0	0	1	0	0	0		0	1	0	0	0	0	0
X	0	4	0	4	0	0	0		X	0	0	0	0	0	0
8X 3				8 12						優勝 四戦全勝		11X 0		9X 4	

才一戦		才三		才二戦		才一戦		才二戦		才一戦	
東海大	亜細亜大	東海大	亜細亜大	成蹊大	拓殖大	自由学園	亜細亜大	成蹊大	拓殖大	自由学園	亜細亜大
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	1	0	4	0	0	0	0	0
4	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
X	0	0	0	0	0	X	3				
9X 0				1 4		5 8		15X 4			

決勝戦

一ツ橋大	0	0	0	0	0	0	0	0	0
亜細亜大	0	0	1	0	2	2	0	0	0
								X	0
									5X 0

二部昇格

才二部

37年度秋季リーグ戦

亜細亜大	2	0	0	0	0	2	0	1	0
学習院大	0	0	0	0	0	0	0	0	1
									1 5

以下試合中

関東選手権大会

○才二回大会 (36年六月)

一回戦

専修大 (一部)	3	0
亜細亜大 (四部)	4	0
	1	0
	2	0
	0	0
	1	0
	X	0
		11X 0

○才三回大会 (36年六月)

一回戦

亜細亜大 (三部)	3	0	0	1	1	0	0	1	0
学習院大 (一部)	0	0	2	0	1	0	0	0	0
									3 7

二回戦

法政大	0	0	0	3	0	0	1	0	0
亜細亜大 (三部)	0	0	0	0	0	0	0	0	1
									0 5

○才四回大会 (37年六月)

一回戦

亜細亜大 (三部)	0	0	1	0	2	0	0	0	0
神奈川大	0	0	0	0	0	0	0	0	0
									0 3

二回戦

慶応大	0	0	0	1	0	0	2	0	0
亜細亜大 (三部)	0	0	0	0	1	0	0	0	0
									2 3

あ　と　が　き

やつと、我々の「球音」才一号が生まれました。初めてで原稿を書いて戴く期間が短かつたので、全部員に書いて戴けなかつたのを残念に思います。以後内容を豊富にし、未長く可愛いがつて下さることをお願い致します。

先生にはお忙しい中を御協力をして戴き、有難とうございしました。そしてこの本の製作に御協力下さつた諸君に心からお礼申し上げます。

一九六二・十・五

昭和三十七年十月五日　印刷

同　年　十月十五日発行

発行責任者　川　崎　俊　郎